

家族介護者が認知症カフェを利用する為に必要な情報と入手方法の分析

Analysis of the information needed by family caregivers to obtain and use a dementia cafe

甲斐 博美 Hiromi Kai

大分県立看護科学大学 Oita University of Nursing and Health Sciences

大嶋 花奈 Kana Oshima

大分厚生連 鶴見病院 Oitaken Kouseiren Tsurumi Hospital

2019年5月9日投稿, 2020年11月4日受理

要旨

本研究では、家族介護者が認知症カフェを利用する為に必要な情報とその入手方法を分析することを目的とした。対象は、A県で認知症カフェを利用したことがある認知症高齢者の家族介護者9名で、平均年齢は64.8歳、介護歴は1年から9年であった。家族介護者が認知症カフェを利用する為に必要な情報として、大きく3つのカテゴリ【運営状況】、【具体的活動内容】、【アクセスの容易さ】が抽出された。本研究の対象者9名中7名が認知症ケアに関する専門職から情報を入手していたが、その家族介護者が望む情報の入手方法としては、日常生活に密着した回覧板・折り込みチラシ・新聞や市報・インターネット・張り紙や看板を求めている。その結果から、家族介護者にとって簡単で、かつ家族介護者自身の生活スタイルに適した情報入手方法の必要性が示唆された。

Abstract

This study aimed to analyze the information that family caregivers need for obtaining and using a dementia cafe. The subjects were nine family caregivers of adults with dementia who had used dementia cafes in Prefecture A. Their average age was 64.8 years old and the number of years of experience in caregiving was one to nine years. As information that family caregivers need for using a dementia cafe, [Operation conditions], [Content of specific activities] and [Easiness of access] were extracted. Seven out of the nine subjects in this study obtained information from dementia care specialists. The methods to acquire information that the family caregivers preferred were those that were close to their everyday life and included circular notices, flyers, newspapers, city bulletins, the internet, and posters and signboards. The results revealed the need of information acquisition methods that the family caregivers can easily use and are suitable for the lifestyle of the caregivers themselves.

キーワード

認知症カフェ、家族介護者、情報入手

Key words

dementia café, family caregivers, data acquisition method

1. はじめに

認知症高齢者の家族介護者は、「認知症高齢者の介護をし始めてから生活のしづらさを感じている」ことが明らかになっており(公益社団法人認知症の人と家族の会 2013, 佐藤・新井 2008)、認知症高齢者を介護する家族に対する支援体制の強化が必要である。厚生労働省は、2015年認知症施策推進総合戦略(新オレンジプラン)を策定し、「認知症の介護者への支援」の具体的項目に「認知症カフェの設置」を挙げ、介護する家族の負担軽減策の一つの柱として位置付けた(厚生労働省 2015)。認知症カフェとは、認知症の人や家族介護者に限定されず、地域住民、専門職の誰もが集う場であ

り、それぞれが関わって成り立つ」(武地 2015)とされている。2018年度には、47都道府県1,412市町村で7,023カフェが運営され、その設置主体は、介護サービス施設・事業者、地域包括支援センターが多い(厚生労働省 2019)。

認知症カフェは、認知症高齢者や家族介護者にとって気軽に利用できる身近な場所で、認知症の専門職とも関わることができ、家族介護者の支援として広く推奨され始めている。しかし、一方では「認知症カフェの設置推進から日も浅く、そのイメージや知識が乏しい為に参加につながらず、認知症カフェの発展が阻まれている」現状が報告されている(増井 他 2015)。また、「多様化する

認知症カフェの目的が見えにくく認知症カフェを選択しにくいことや家族介護者が必ずしも望む内容ではないこと」が報告されている(社会福祉法人東北福祉会 認知症介護研究・研修仙台センター2017)。このような背景から、認知症カフェは家族介護者を含め地域の情報共有の場として重要であるとされているものの、認知度は低く、利用が進んでいない現状があった。

そこで本研究では、家族介護者が認知症カフェを利用するために必要な情報とその入手方法を分析することを目的とした。

2. 方法

2.1 対象

対象は、A県の認知症カフェを利用したことがある認知症高齢者の家族介護者とした。対象の認知症カフェの選定に当たっては、A県のホームページに掲載されていた17施設の中から(2018年6月)、研究者が地域の特性を理解できている4施設を選定した。まず、各認知症カフェの代表者に研究の依頼をし、研究協力の同意が得られた代表者から承諾書を頂いた。次に、対象者となる家族介護者の選定に際しては、各認知症カフェの代表者や運営に携わる関係者より、(1) 認知症を持つ人の介護経験がある事、(2) 体力や生活に支障なくインタビューに答えられる事、の条件に適合する家族介護者の推薦を得た。その内、同意が得られた方に対して研究依頼と研究協力及び途中辞退の自由とそれに伴う不利益がないことや得られたデータは匿名化すること等を説明し、紙面による承諾を得た。本研究は、大分県立看護科学大学の倫理安全委員会の承認を受けて実施した。

2.2 データ収集方法

- 1) 調査期間は2018年8月から10月とした
- 2) 認知症高齢者の家族介護者の経験をより多く導き出し、その実態から支援につながる

研究にするためにインタビューの方法を選択し内容を以下に示す。

インタビュー内容

インタビュー内容は以下の3項目である。

- (1) 家族介護者の基本属性(年齢・性別・同居の有無・家族構成・認知症高齢者との続柄・介護歴)

- (2) 認知症カフェの情報収集手段、家族介護者が望む情報収集手段

- (3) 認知症カフェを利用するために家族介護者が必要な情報

2.3 インタビュー方法

上記内容のインタビューガイドを用いた半構造化面接を、認知症カフェ開催時間内の10～30分間実施した。事前に対象(家族介護者)が話しやすくリラックスできる場所を確保し、当日対象の希望に沿った時間と場所でインタビューを実施した。

2.4 分析方法

インタビューの結果を逐語録として起こし、そのデータを共通性・類似性によってカテゴリ化した。

3. 結果

3.1 対象の概要と認知症カフェの情報入手方法(表1)

インタビューの対象となった家族介護者の平均年齢は64.8歳であり、男性2名、女性7名の計9名であった(表1)。介護歴は1年から9年であった。認知症カフェを知った契機及び情報源となった情報の入手方法は、9名中7名が認知症ケアに関する専門職(ケアマネージャー、医師、介護士)であった。

表1. インタビューの対象となった家族介護者の概要と情報入手方法

家族介護者					
記号	年齢	性別	認知症高齢者との続柄	介護歴	認知症カフェの情報入手方法
A	80代	男性	夫	3年	医師
B	40代	女性	娘	5年	ケアマネージャー
C	50代	女性	娘	3年	介護士
D	80代	男性	夫	3年	ケアマネージャー
E	60代	女性	娘	3年	ケアマネージャー
F	60代	女性	娘	9年	認知症家族の会
G	60代	女性	娘	8年	回覧板
H	60代	女性	娘	1年半年	ケアマネージャー
I	60代	女性	娘	1-2年	医師

3.2 家族介護者が認知症カフェを利用するために必要な情報(表2)

家族介護者が認知症カフェを利用するために必要な情報は、大きく3つのカテゴリ【運営状況】、【具体的活動内容】、【アクセスの容易さ】に分けられた(表2)。

【運営状況】は、《認知症カフェの概要》《認知

症の人に対応できる専門職がいること」など、認知症カフェの運営に関する情報が抽出された。次に、【具体的活動内容】は、「認知症カフェ開催のスケジュール」「認知症や介護についての情報提供」「認知症カフェのイメージ」であった。更に、運営状況や活動内容だけでなく、【アクセスの容易さ】については、「帰る途中にショッピングモールに足を運び買い物して帰る。カフェの周辺に何があるか分かればカフェに行く他に外出の機会となる」「周囲の建物がわかれば通いやすくなる」という「認知症カフェの立地とアクセス」や、施設までのスロープ設備や、駐車場の有無やバスでの送迎などの「施設の設備・安全性」など、認知症カフェのある近隣の具体的なイメージができ、自宅から通えるかどうかの判断につながる認知症カフェ開催地の周囲状況に関する情報を求めている。

表2. 家族介護者が認知症カフェを利用するために必要な情報

カテゴリ	サブカテゴリ	コード	件数
運営状況	認知症カフェの概要	参加者の年齢層や性別や介護歴	1
		サロンと認知症カフェの違いがわかれば参加しやすい(認知症高齢者の症状が進むとサロンに参加しにくくなるため)	1
		同じような境遇の人と関わることができるか教えてほしい	1
		他の認知症カフェにも行ってみたいかわからない	1
		料金、介護するためにお金がかかるから参加費は安い方がいい	1
	認知症の人に対応できる専門職がいること	どのような人材がいて、どのような方針で行っているのか、スタッフがどのような形で働いているのか	1
		認知症高齢者を一人で預けていられるかどうか	1
		専門職がいることを伝えてくれると家族は安心できる	2
		どのような流れで具体的に何を行っているのか	3
		開催頻度や日にちや時間が書いていれば行きやすい	1
具体的な活動内容	認知症カフェ開催のスケジュール	心と体の準備のために早めその日の活動内容が知りたい	1
		認知症を持つ人が楽しく過ごすことができるかどうか	1
		認知症についての情報提供をしているか	1
		認知症介護についての細かい情報提供があるか	1
		写真や絵が載っていたらわかりやすい	2
	認知症カフェのイメージ	設備等は緊張するが、カフェであれば過ごしやすい。カフェは緊張せずリラックスできるということを事前に教えてもらえれば参加しやすい	1
		ネットでは正しいことがわからなくなる。認知症カフェのその場に行っている人たちが何を感じたかを知りたい	1
		帰る途中にショッピングモールに足を運び買い物して帰る。カフェの周辺に何があるか分かればカフェに行く他に外出の機会となる	1
		周囲の建物が分かれば通いやすくなる	1
		細かく場所が書いていれば行きやすい	1
アクセスの容易さ	認知症カフェの立地とアクセス	近くの公園は散歩があってスロープはないため、足が悪い人や車いすの人には行きにくい。カフェはどのようなか気になる	1
		駐車場の有無やバスでの送迎があるか心配である。バスでの送り迎えがないか知りたい	1
	施設の設備・安全性		

3.3 認知症カフェの望ましい情報入手方法とその理由 (表3)

認知症カフェの望ましい情報入手方法には、回覧板・折り込みチラシ・新聞や市報・インターネット・張り紙や看板が挙げられた (表3)。回覧板を望む理由は、「目に留まる」こと、折り込みチラシは、「回覧板だと周りに回さないといけないから、チラシもらえたらいい。自分のものがなかったらじっくり見れないし、忘れちゃう。手元に残るの

がいい、紙で見るのが一番いい。」等、自宅で通常目にする情報入手方法が示された。また、新聞や市報を望む理由としては、「紙で見たい」「インターネットは、歳を取ってきたら見なくなった。字が小さいし、目が悪いから。使い方が面倒で難しい」という紙媒体の注目が示された。自宅外での望ましい入手方法としては、「カフェに行かなくてもわかる看板や張り紙があればいい」「レジの所なら一番見る」という日常生活における具体的な入手方法を求めている。

表3. 認知症カフェの情報収集に関する望ましい入手方法とその理由

望ましい入手方法	望ましい理由	件数
回覧板	回覧板を見たことを覚えている、回覧板だと目に留まるから良い。	1
折り込みチラシ	新聞は私たちの代には必要とは思わないから新聞に載ってても見えないかな。新聞に折り込みチラシとしてあったら見るんだろうけど。	1
	回覧板だと周りに回さないといけないから、チラシもらえたらいい。自分のものがなかったらじっくり見れないし忘れちゃう。手元に残るのがいい、紙で見ると一番いい。	1
新聞・市報	市報や地域の新聞、団地の新聞などに取上げてほしい。	2
	新聞や市報などの紙で見たい。(インターネットは、歳を取ってきたら見なくなった。字が小さいし、目が悪いから。使い方が面倒で難しい)	1
	新聞は見ないが市報やチラシなどは見る。	1
インターネット	インターネットが早く見れる世の中だから情報を知ることができる。	1
	同世代では新聞をとっている人はあまりいない。	1
張り紙・看板	カフェに行かなくてもわかる看板や張り紙があればいい。	1
	入り口(認知症カフェ)にかわいい感じで書いてれば立ち寄りやすい。	1
	レジの所なら一番見る。	2
	張り紙や看板などの目立つものがないとわかりにくい(認知症カフェの場所)。	1

4. 考察

4.1 家族介護者が認知症カフェを利用するために必要な情報

認知症カフェに関する情報は、A県のHPによると、開催場所や日程、利用料金や大まかな活動プログラムが掲載されていた。今回の結果から、家族介護者が認知症カフェを利用するために必要な情報は【運営状況】、【具体的活動内容】、【アクセスの容易さ】という3つのカテゴリが分類された。家族介護者は、どのようなサポートを受けることができるのかという「認知症カフェの概要」「認知症の人に対応できる専門職がいること」などの【運営状況】についての情報を求めている。また、【具体的活動内容】では、「専門職がいること」や「一人で預けていられるか」という、介護家族者の安心につながり、参加の動機にかかわる情報を必要としていた。また、認知症カフェに参加する

ためには、「心と身体の準備のためには早めに活動内容が知りたい」「(本人が) 楽しく過ごせるかどうか」という、認知症を持つ人自身が、認知症カフェを楽しみ、通えるかという、当事者にとっての情報を必要としていた。

更に、家族介護者にとっての、「認知症・認知症介護の情報提供」という介護の課題と、参加の動機にもつながる「認知症カフェのその場に行っている人たちが何を感じたか知りたい」という、利用者の経験談などの実体験を含めた、「認知症カフェのイメージ」をもてる情報を求めている。

このように、認知症カフェを具体的にイメージでき認知症を持つ人や家族介護者自身に適しているかを判断する情報が必要となることが明らかになった。

また、「認知症カフェの目的は、交流を持ち心やすらぐ場であること」(Greenwood et al 2017)と示されるように、家族介護者にとって、参加者同士の交流や、やすらぎの場であることという、心理面での意義もわかるような情報も、イメージするために必要であると言える。認知症カフェは、家族介護者の年代や様々な生活状況等によっては、時間的・体力的に通うことが困難な場合もある。「近くの公園は階段があってスロープはないため、足が悪い人や車いすの人には行けない。カフェはどうなのか気になる」と、安全に行けるかどうかの「施設設備・安全性」の情報も参加できるかの条件に必要となる。認知症カフェ開催地の立地状況、地域特性や自宅からの交通手段などの周囲環境の情報などの【アクセスの容易さ】は、認知症高齢者と家族介護者の両者が自宅から認知症カフェに通えるイメージを深めることになる。また、「帰る途中にショッピングモールに足を運び買い物して帰る」ことや「カフェの周辺に何があるかわかればカフェに行く他に外出の機会となる」ことから、認知症カフェからの帰り路で買い物するなどの「ついでの外出の機会」を持つことは、両者にとって、生活の充実につながり、生活圏内の場所であれば利便性が高くなる。これは社会的孤立の防止にもつながり(角・多久島 2018, 田代 他 2019)、気軽に交流できるという認知症カフェの目的の1つにもつながる。

認知症カフェ開催地の立地や周囲環境などのアクセスに関する情報は、その認知症カフェに通え

るかどうかを判断する、家族介護者が通えるイメージを持つために重要な情報であると指摘されている(和田 他 2019)。

家族介護者を取り巻く課題は、老々介護や若年世代による介護、子育てと介護のいわゆるダブルケアなど、介護の背景は多様である。本研究の対象も40代から60代と幅広く、その介護歴も様々であり、多様な背景を持っていた。家族介護者は、「介護開始直後の混乱した時期を過ぎると介護初期の混乱から移行して介護体制を整えると同時に、心理的なサポートが得られる場として体験を共有する場の存在を重要視している」と示される(宮上 2004)。

認知症カフェを利用する際に必要な情報は、家族介護者の介護の段階における課題も熟知した上で丁寧に検討する必要がある。以上のことより、家族介護者が直面する介護の課題や生活に適し、生活に取り入れられるかどうかの判断ができるような具体的な情報が求められる。

4.2 望ましい情報入手方法の特徴と情報発信の多様性

認知症カフェの情報は、専門職からに限らず、自宅において、回覧板や折り込みチラシ、新聞・市報で情報が入手しやすく、繰り返し見られる紙媒体の活用しやすさが求められていた。また、日常的な外出先で目に触れる広告を求めている。誰もが日常的に利用する場所に、張り紙・看板があることは、認知症カフェの情報の入手の拡大につながる。認知症カフェの存在や内容を伝える方法として、「誰でも気軽に認知症カフェの情報を目にすることができるような場所での宣伝の必要性」(浅岡 2015)が示すように、誰もが日常生活において選択しやすい様々な入手方法を理解する必要がある。

今回の結果から、家族介護者は、回覧板・折り込みチラシ・新聞など数種の紙媒体やインターネット等、自分自身の日常生活に適した活用しやすい方法を望んでいた。そのことから、家族介護者の世代によっても情報入手方法には違いがあることを考慮する必要があると言える。今回の対象は、実際には認知症カフェの情報を主に専門職から得ていたが、たとえ専門職とつながりがなくても手軽に情報入手できる方法として、家族介護

者の日常生活や習慣に適したものを望んでいることについても示された。

本研究の対象の平均年齢は64.8歳と高く、家族介護者自身の世代と背景を理解した上で自宅や外出先での生活スタイルに合った媒体が望まれる。大切なことは、認知症カフェを必要とする情報を家族介護者に確実に届けることである。幅広い世代が関わる認知症の介護支援において、家族介護者が必要な情報を日常的に入手できるような方法を更に検討する必要がある、これらの違いを理解した情報の精選と多様性を持つ情報発信が認知症高齢者の家族介護者支援の一助となると考えられる。

5. 結論

家族介護者が認知症カフェを利用するために、運営状況や具体的活動内容に加えて、自分の生活に適した通えるイメージを持てるアクセスの容易さを判断できる情報が求められていた。更に、その情報の入手方法は、家族介護者の生活背景に適した媒体を望んでいることがわかった。家族介護者にとって、情報の入手方法が簡単で、かつ家族介護者自身の生活スタイルに合った情報入手方法の必要性が示唆された。

6. 本研究の限界と課題

本研究における対象者数の少なさとそれに伴うデータ数の乏しさは、結果の一般化に限界をもたらしている。今後は、対象者数を増やし、家族介護者の介護歴や年代・性別などの分析をすることにより、幅広い世代と背景を持つ家族介護者にとって、認知症カフェの利用が容易になる為の情報や入手方法の検討が課題である。

尚、本論文に関して、利益相反関連事項はない。

謝辞

本研究の実施にあたり、ご協力頂きました皆様ならびに大分県立看護科学大学言語学研究室宮内信治准教授に心より御礼申し上げます。本研究が認知症カフェの発展に貢献し、認知症の方々や介護するご家族の生活の充実につながることができると幸いです。

引用文献

浅岡雅子(2015). 魅力あふれる認知症カフェの始め方・続け方. pp38-39. 翔泳社, 東京.

Greenwood N, Smith R, Akhtar F et al (2017). A qualitative study of carers' experiences of dementia cafes: a place to feel supported and be yourself. *BMJ Geriatrics* 17, 164. DOI: 10.1186/s12877-017-0559-4

公益社団法人認知症の人と家族の会(2013). 認知症カフェのあり方と運営に関する調査研究事業報告書. <http://www.alzheimer.or.jp/pdf/cafe-web.pdf> (最終閲覧日: 2020年6月18日)

厚生労働省(2015). 認知症施策推進総合戦略(新オレンジプラン). https://www.mhlw.go.jp/file/04-Houdouhappyou-12304500-Roukenkyoku-Ninchi-shougyakutaiboushitaisakuisuishinshitsu/02_1.pdf (最終閲覧日: 2019年3月31日)

厚生労働省(2019). 認知症施策推進大綱. <https://www.mhlw.go.jp/content/000567640.pdf> (最終閲覧日: 2020年6月10日)

増井玲子, 佐藤友美, 吉田留美 他(2015). 認知症の人を介護する家族支援としての認知症カフェの意義. *認知症ケア事例ジャーナル* 8(3), 209-218.

宮上多加子(2004). 家族の痴呆介護実践力の構成要素と変化のプロセス-家族介護者16事例のインタビューを通じて-. *老年社会科学* 26(3), 330-339.

佐藤敏子, 荒井淑子(2008). 認知症高齢者の家族介護者のQOLに関する文献検討. *上武大学看護学部紀要* 4, 35-40.

社会福祉法人東北福祉会 認知症介護研究・研修仙台センター(2017). 認知症カフェの実態に関する調査研究事業 報告書. 15-16. https://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-12300000-Roukenkyoku/97_touhokuhukushi.pdf (最終閲覧日: 2020年6月10日)

角マリ子, 多久島寛孝(2018). 認知症カフェ及びサロンにおける認知症者とその家族支援についての文献的考察. *熊本保健科学大学研究誌* 15, 109-120.

武地一(2015). 認知症カフェハンドブック, p36. クリエイツかもがわ, 京都.

田代和子, 小板橋美恵子, 平澤マキ 他(2019). 大学

と地域住民が連携協働する「認知症カフェ」の開催が利用者にもたらす成果—グループインタビューによる質的分析—. 淑徳大学看護栄養学部紀要 11, 19-29.

和田夏佳, 中川春菜, 目良宣子 (2019). 認知症カフェ運営における困りごと及び継続に必要な要因分析. 山陽看護学研究会誌 9(1), 49-54.



著者連絡先

〒870-1201
大分県大分市大字廻栖野 2944-9
大分県立看護科学大学 成人・老年看護学研究
室(NPコース)
甲斐 博美
kaihiromi@oita-nhs.ac.jp